
ピーチでシャープな彼女達

北野 鉄露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピーチでシャープな彼女達

【Nコード】

N4170V

【作者名】

北野 鉄露

【あらすじ】

私立桃園商業高校にやってきた無愛想な新入生、その名は片桐勇作。イカレたド変態ツンデレ親父&おっとり優しい巨乳美人の姉と暮らす彼は「東南西北流」剣術の使い手で、七代目を継ぐよう執拗に迫られていた。入学早々、東南西北流にまつわる秘事をめぐって次々と群がり出てくる美少女や変態、その他以下省略な連中。彼の剣が静かな唸りを上げる時、陰謀渦巻く学園中に嵐が吹き荒れる――とかなんとか、実際はどうだかわかったものじゃない中途半端い加減学園系コメディ。【11月まで小説をお休みします。再開次

第、連載中に戻します】

Vol. 1 七代目の憂鬱

静寂に包まれた剣術道場。

その中央、道着姿の壮年と若者が向かい合い、冷たい床の上に間をとって着座している。

壮年は総髪で、後ろ髪をそのまま背中へと垂らしている。太く引き締まった眉、やや三白眼気味ながらも鋭い目つき、全体的に角ばった相好。見るからに武道家、といった風を漂わせていた。

対する若者。

切れ長の目が涼しく、鼻筋はまっすぐ通り口元はきりりと小さく結ばれ、なかなか整った容貌をもっていた。長めに伸ばされた髪の毛が無造作に頭を覆っていて、そのあたりが今どきの若者を思わせる。が、両手を膝の上に置き、容儀を正して座っている姿はいかにも凛々しく精悍な雰囲気がある。

二人は少しの間、身じろぎ一つすることなく互いの視線をぶつけ合っていた。

張り詰めたままの空気が動かない。

遠くの空で繰り返し啼くカラスの声だけが、重く静まり返った道場の空間にうつすら響いている、

どれくらい経ったか、不意に壮年の細い毗が「カツ」と大きく見開かれた。

間髪を容れず、道場中に響き渡るような大声で

「――それでは勇作っ！ 東南西北流六代目、片桐源斉が今からお前に」

叫びながらごそごそと懷をまさぐり、一本の巻物を取り出した。それを勇作といった若者の方へぐいっと突き出して示し

「流儀一切を極めたことを認め、七代目相続を許可するこの皆伝書を授け——」

「……要らん」

言い終わるのを待たず、あっさり一言で拒絶した勇作。

すると源斉は一瞬「えっ？ 要らないの？」という顔をしたあと

「喝ーッ！ 要らんとは何事だ、要らんとは！ 初代一刀斎様に始まり、代々東南西北流を継ぐに相応しい者だけが手にすることが出来たという由緒正しい皆伝書であるぞ！ それを、それを、要らんとは何事であるか、勇作っ！ 我が子と言えども、聞き捨てならぬ！」

顔中を口にして咆えた。

が、すぐに眉を垂らし、弱ったような表情をして

「……ねえ、ホントに、要らないの？ すごい物なんだよ、コレ？
わかるよね？ ねえ？」

猫撫声を出しながら四つんばいで擦り寄ってきた。

勇作は「ちっ」と短く舌打ちし

「だから、要らねえつつってんだろ。お前の体臭が染み付いたクサい巻物なんか、誰が受け取るかよ。明日の燃えないゴミにでも出しておけ——」

言い捨てるなり、腰を上げようとした。

すでに目一杯接近している源斉、両手で勇作の道着の袖を捉え

「そーいうコト、言うなよお！ 父さんだって、毎日風呂入ってる

しい。ナニだってちゃんと洗って清潔にしてんだぞお。……あ！
何だったら今晚、一緒に入って見せてや——むぼ！」

源斉の顔面に勇作の拳がめり込んでいる。

「……貴様と風呂に入るくらいなら肥溜めに浸かった方がマシじゃ、ボケ！」

さっさと立ち上がった。

これ以上、付き合うだけ時間の無駄としか思えない。

物理的にも拒絶された源斉は赤くなった鼻っ柱を両手で押さえつつ、恨みがましい視線を向け

「な、何をする勇作っ！ この父は、お前をそういう子に育てた覚えはないんだからね——もべっ！」
「ええい！ いい歳した中年オヤジがツンデレこくな！ キモいんじゃない！」

二撃目はタメ蹴り炸裂。

あまりのキモさに、素手で触る気がしなかったのだ。

横っ面にガチ蹴りをもらった源斉はといえば、道場の床に転がってびくびくやっている。

乱れかけた道着を直しながら、そんな父親を冷たい目で見下ろした勇作。

「……ふん。皆伝書なら姉さんにくれてやればいいじゃねえか。俺より筋がいいんだろう？」

身を翻し、道場から出て行こうとした。
が。

その背後でダウンしていた筈の源斉がゾンビの如くむくりと起き上がるなり、勇作の背に向かって

「ま、待て勇作！ お前がそこまで言うなら、皆伝書の相伝はひとまずおくことにしよう。――だが、これだけはどうか、聞き届けてもらいたい！」

呼びかけた。

さっきまでさんざんフザけていた（本人にそのつもりがないから余計タチが悪いが）くせに、声に必死な調子がある。

途端に、ぴたりと足を停めた勇作。

ゆらりと立ち上がった源斉はダメージが効いているのか、肩で大きく息をしている。

しかしすぐに顔を振り上げざま、いかつい相好を「にへらっ」とだらしなく笑み崩し

「高校へ進学するからには一刻も早く、可愛いおにゃのこをゲットするのだぞ！ できればこう、目がぱっちりした萌え萌えロリ顔でむっちんボインなのがいいな。あ、ロングヘアでFカップ以上限定ね。そのコとたくさんにゃんにゃんして子をもうけ、早くこの父に孫の顔を――べがっ！」

――源斉、撃沈。

ぱったりと仰向けに倒れたまま、動かなくなった。

勇作が全力でぶん投げた竹刀が、いやらしくとろけていた源斉の面にヒットしたのだ。

ぜえぜえと荒く呼吸しつつ、ごくりと唾を飲み込み

「……手当たり次第女をとっかえひっかえしたてめえと一緒にすんじゃねえ。俺に女なんか必要ないっつーの。俺は剣術を極めること

にしか興味ねーんだよ。こつたらクソ剣術じゃない、本物の剣をな。
——同じコトを何度も言わせんじゃねえ」

言い放つと、肩をいからせながら道場を後にした。

再び静寂が訪れた道場の真ん中、源斎が大の字に転がっている。

——今度こそ本当に気絶していた。

ぱたぱたと渡り廊下を通って母屋に戻った勇作。

気がつくど、大した稽古もしていないというのに、妙に汗を掻いている。あの淫乱ド変態六代目の相手をしたせいであることは言うまでもない。

これはひとつ風呂浴びねばなるまい。

思いつつ廊下を歩いていると

「……あら、勇ちゃん。お父さんの大事な話は終わったの？」

左側にある居間から呼び止められた。

勇作はつと立ち止まって

「大事な話なもんですか。懲りもせずに皆伝書がどうのこうの、下らん話ですよ。弥生姉さんからも一言言ってやってください。俺は受けるつもりなんか毛頭ありませんから」

不愉快そうに言った。

だだっ広い居間の中央には大きなちゃぶ台、エプロン姿の若い娘が夕食の準備らしくその上に茶碗や箸を並べている。

年の頃は勇作とさほど変わらない。

ぱっちりとした瞳、ロリとは言えないが萌え顔、茶色くふさふさ

のロングヘア、ついでに胸のふくらみがこれでもかとはかりに大きく、つけているエプロンが今にも弾けそうに見える。サイズ的にはFどころか、Gでも足りるかどうか。——とどのつまり、源斉の理想像そのままの女性、である。

弥生姉さん、と呼ばれた娘は腰を上げて仕方なさそうにおつとりと笑い

「あらあら。私は勇ちゃん以外に七代目に相応しい人はいないと思ってるのよ？ 私だって少しは修行したけど、手筋はとても勇ちゃんには及ばないもの。それに、東南西北流を継ぐのは男の人と決まってるって、お父さんも言っているし……」

両腕で盆を抱くようにした。

すると、勇作の特徴ある切れ長の目がきゅっと細められる。

「そいつは間違いです。流儀を正しく相伝するためには、何よりも手筋のいい者を選ばなければならない。男も女も関係ないでしょう。それを、あのド変態野郎は……！」

固められた握り拳が震えている。

弥生はふうっと大きく一つ溜息をつく、彼の傍にぱたぱたと近寄って行き、

「そう言わないで、勇ちゃん。お父さんにはお父さんなりの考えがあるのよ。だから、こうして——」

優しくかけられた声はそこで途切れていた。

勇作の拳がそのまま、彼女の顔面目掛けて突き出されてきたからである。

間合いからいって、外れる方がおかしい。瞬息の突きは無情にも

弥生をとらえかけた。

が、刹那。

彼女の姿はふっと掻き消えていた。

鉄拳は虚しく宙を裂いていく。

一撃をかわされた勇作があっと思った瞬間にはもう、いつの間に動いたのか、弥生は彼の背後にいる。

ほんの僅かながら、妙な気配が背中の中の表面をすうっとなぞっている。

その感覚はたちまち冷たくおどましく変化し、勇作の背筋を凍らせた。

——だが。

それもコンマ数秒の間に過ぎない。

「……おイタは駄目よ、勇ちゃん」

盆が落ちて廊下の板を打った。

両腕を回し、後ろから勇作の身体を抱きしめている弥生。

彼の厚い肩に、そっと頬を寄せた。

「気持ち、すごくわかるよ。でも、あんまり思い詰めちゃ駄目。私はいつだって勇ちゃんの味方だから……ね？」

腕に力がこもる。

彼女のぬくもりを背中一杯に感じている勇作。

突き出されたままになっていた拳をゆっくりと引っ込めながら

「でも……やっぱり姉さんの方が強かったじゃないですか。今、俺は本気で打ち込んだのに……」

呟いた。

口調といいその表情に悔しさが滲んでいる。

弥生は手を伸ばして彼の頭を「よしよし」と撫でてやり

「勇ちゃん。かわせたから強いということにはならないでしょ？
だってね——」

ふふっ、と可笑しそうに笑った。

「……その拳に殺気が宿っていたんだもの、かわせて当たり前でしょ？ 攻めの気を悟られぬが攻めの極意なりって、兵法書にもあるじゃない。勇ちゃんにだってできるよお？」

そういうことか、と思いつつも、心の奥底では納得していない勇作。

弥生は突きをかわしただけではない。

瞬時に背後をとったばかりか、恐ろしいまでに強い気を放った。

その気を背に感じた途端、勇作は動けなくなってしまったのだ。

今同じことをやってみると言われても、とても真似などできない。

やはり弥生の強さは勇作の数段上をいつている。

彼にとっては屈辱以外の何物でもなかった。

弥生に引けをとっていることは別にいい。

そんなことよりも——自分よりも強いこの姉を差し置いて、東南西北流の跡を継げと無理強いされていることが、である。

道場で撃沈しているあのツンデレ変態六代目は、勇作が男だからというそれだけの理由で七代目を継がせようとしているのだ。それが嫌なら早く結婚して男の孫をつくれという。

寝言は寝てから——否、源斉に限っては「死んでから言え」といつてやりたい。

なぜそこまで「男の跡継ぎ」にこだわるのか。

何度質問しても（最近は力ずくで白状させようとしているが）源

斉は答えてくれない。というよりも、喋ってはならない事情でもあるのか、ことごとくはぐらかされてしまう。

業を煮やした勇作は、徹底的に源斉を忌避することに決めた。

が、このド変態親父はつくづく救えない。

息子が自分とは真逆の真面目な性格であることを逆手にとり、何かともっともらしい理由を構えては道場に呼び出し、跡継ぎの件を承知させようとする。さっき呼ばれたのも「お前にまだ伝授していない技がある」というから出向いていったのだ。いかにも勇作の歓心を得そうな口実である。

その後は決まっただけなのだが――源斉が諦める気配はまるでない。

いっそのこと、闇討ちして息の根でも止めてしまえばいいのだが、真面目な勇作にそれは出来かねた。剣の道を極めんとする者は卑怯な振る舞いに及んではならない、という思想で自分の身体を常時雁字搦めに締め付けている。

もっとも、その一項を彼に教え込んだのは誰でもない、源斉自身なのだが――。

「あんまりしつこくしないよう、お父さんには私からよく言っておくから、そう怒らないで。ね？」

ぱっと離れるなり、顔を覗き込むようにした弥生。

二つの大きな瞳がしっかりとこちらを見ている。

勇作は困ったように目を反らしつつ

「まあ、姉さんは、悪くないですから……」

時々やり場のない不平不満をぶついたりするものの、なんだかんだで結局この姉には頭が上がらない。

その一言を聞いた弥生はぴょんと後ろに跳ねてからにっこり微笑

み

「ありがと、勇ちゃん！——さ、お風呂で汗流してから着替えてらっしゃい。明日は勇ちゃんの入学式だし、今日は腕によりをかけてご馳走にするからね？」

盆を拾い上げると、嬉しそうに台所へ行ってしまった。

はあっと溜息をついた勇作。

源斉のせいで軽く記憶から飛んでいたが、明日は高校の入学式が控えている。

高校は「私立桃園商業高校」という。

（行きたくねえなあ……。マジ、行きたくねえ）

湯船に一気に身を沈めながら、勇作は胸中で「行きたくねえ」を繰り返している。

その理由は、さして複雑ではない。

（女子生徒ばっかなんてありえねえ。せっかく静かに暮らしていいと思うってたのに、また女所帯に逆戻りなんてなあ……。まさか理事長、親父みたいにドのつく変態なんじゃないだろうか？）

あとで知った情報だが、全校生徒の約八割が女子であるらしい。聞いた瞬間、この世の全てが足元から崩れ去っていくような気がした勇作。

ならば何故受けたのかという話に当然なるのだが、中学校時代成績の良くない勇作が辛うじて引っかった唯一の学校だったからである。元より選択の余地などなかった。

ただし。

ちらと耳に入ったところでは、どうも源斉が裏で何やら画策した

とかしないとか。通学に要する時間と距離さえ気にしなければ、他に選択肢はあったかも知れないのだ。

だとすれば、源斎を何回葬っても飽き足りるものではない。

決定的証拠がないから黙っているものの、いずれ尻尾をつかんでやろうと勇作は思っている。

（ちつくしょー。フタを開けてみりゃどうってことはない、何もかもあいつの都合のいいように仕組まれてたって事じゃねーか。キモいクセして、悪知恵だけは回ってやがる）

考えれば考えるほど、むらむらと腹が立ってくる。

が、風呂場で一人怒ってみたところでどうにかなるものでもない。気持ちを落ち着かせようと、ぐっと鼻先まで浸かった。

まっさらの湯が肌に心地よい。

そのまま静かに目を閉じ、頭の中を真っ白にすることに集中してみる。

湯に浸かる際、一日の生活で溜まった余計な思念を払い除け、穏やかでまっさらな状態の自分をイメージする作業が重要であると、何かで読んだ武芸書の一節にあった。

確かに、全身の疲れが癒されていくと同時に、胸中に蟠ったもやもや、とりわけ源斎に対する怒りや憎しみですら、すうっと湯の中へ溶け出していくようで――

「勇作っ！　風呂に入るなら入ると言ってくれればいいものを！」

父さんはな、お前と風呂に入るのが別に嫌なワケじゃないんだから――ねぶぼっ」

「寄るな、ゲテモノっ！　今すぐ息の根止めてくれる！」

――間髪を容れず、片桐家の浴室に断末魔、もといツンデレ親父の絶叫が轟いたのであった。

Vol. 2 入学式の朝に

（あんのクソジジイ、朝っぱらからムカつくぜ……）

胸中メラメラと怒りの炎、どころか地獄の業火を燃やしながら歩いていく勇作。

まったく気分が悪いつたらない。

というのも、つい五分前のこと。

学校へ向かうため玄関でたたきに腰掛けて靴を履いていると

「——おお勇作、これから入学式か！」

背後に源斉の気配が。

いつもそうだが、この変態を相手にするとなんかことにならない。

無視して靴紐を結んでいると

「お前の学生服姿、凛々しくて実によいぞ、うんうん。亡き母さんが見たら、どんなに喜んだことか……」

いきなり泣き出した。

話しかけられた時点でうんざりしかけていたのだが——ただ、母に対する思いについては否定する何物もない。

大好きだった母は勇作がまだ五歳の時、病気でこの世を去っている。

ドのつく変態とはいえ今も母のことを忘れていないのかと思うと、気持ちとして嬉しくなくなかった。

「親父……」

鋭く引き締まった表情をわずかに緩め、そっと振り向いた勇作。
源齊は両眼から滝のように涙を垂れ流している。
感極まったか、両拳を握り締めて天に突き出し

「おお、優子よ！ お前と私の愛の結晶は、ここまで立派に育ったぞ！ ああ、優——ぼぎ」

顔面に鉄拳がめりこんでいる。

「俺の母さんは雪子だ！ はりきって他所の女の名前呼んでんじやねえ！」

——と、いう非常に不愉快な一幕があったのだ。

一文字の間違いといえはそれまでだが、母を粗末にされたようでどうも腹が立って仕方がない。

そのあと（ダメージから復活した）源齊は入学式への出席をほめかしたが、有無を言わず眠らせておいた。眠らせるとは、置いてあった花瓶を彼の脳天目掛けて振り落とすことであるのは言うまでもない。

ともあれ、邪魔者は沈めた。これで後顧の憂いはない。

空は良く晴れ上がっていて日差しはほんのり心地よく、麗らかな春の陽気を感じさせる。

ド変態親父のことは忘れて気を取り直しつつ、今日からの新しい通学路を歩いていると

「よう、勇作！」

「……お、洋介か。おはよ」

十字路でばったり出くわした者がいる。

佐々木洋介。小学校以来の親友である。中学校はもちろん、気が

付けば高校まで一緒になっていた。勇作同様、彼もまた成績は決して良くなかったからだ。ただしスポーツ万能で、ずっと野球部。常にエースで四番という、絵に描いたような花形プレーヤーである。顔立ちが整っていて長身ということもあり、当然ながらモテる。

洋介と勇作は肩を並べて歩き出した。

「いやー、まさかまた一緒だとは思わなかったぜ。勇作、桃商だけは嫌だって言っただけだったっけ？」

どちらかといえば寡黙な勇作とは違い、洋介は陽気で社交的である。二人が揃うといきおい、いつも洋介が会話をリードしているようなかたちになる。

「今も嫌だね。でも、ほかに行けるところがなかったからしゃーねえさ。淡々と通うだけだ」

「そいつは俺も変わんねえよ。松島工業にや落っこちたし、残りは桃商しかなかった。ま、お前と一緒にだからいいかなって思ったんだけどさ、志穂のヤツが――」

志穂というのは彼が付き合っている恋人で、勇作も知っている。彼女がうるさくて敵わないのだと、洋介はうんざりした顔で言った。

「桃商って女の子ばかりだろ？ で、あいつは別の学校。だから、離れているうちに俺がいつかのりかえちまうんじゃないかって疑ってやがるのさ。心配なのはわかるけど、そういうのってムカつくよな。てめーの男を信じられねえのかってハナシだよ」

なるほど、と勇作は頷いてやった。

女の子と付き合った経験は皆無だが、彼が言っていることは何と

なくわかる。

女という生き物は、常に自分の目に見える尺度でもってしか相手を量ろうとしないらしい。男にとってはハタ迷惑でしかないのだが、女はちよつとでもその尺度からずれようものならもう承知しない。相手が全面的に承服するまでなんだかんだと苦情を言う。それが理不尽な事柄であつても、だ。

そうすると、弥生という姉は特別なのだろうか。ふと思った勇作。彼女はいつでもフォローに回ってくれるばかりで、これといって我を立てたことがない。

その弥生も桃商の生徒で、今日から三年生。勇作より二つ年上、ということになる。今朝は入学式に立ち会えないことを残念がりつつ、先に登校していった。

「あんまりうるさかったら、ホントに別れてやろうかなあ。野球部に入ったら毎日の練習も大変そうだし、そうなったら余計文句言ってくるに決まってる。やってられんわ」

とまで愚痴っておいてから洋介は急に思い出したように

「そういや勇作、お前はなんか部活やんの？ 実家が道場だから部活なんかやらなくてもよさそうだけど、さ。桃商にゃ確か、剣道部っぽい、あつたような気がするぞ」

訊いてきた。

「……」

尋ねられてみて気付いたのだが、そういえば何も考えていなかった。

洋介が口にしたように、部活などやらなくてもいいといえればいい。

帰宅すれば道場もあるし、中途半端な強さの剣道部の連中を相手に稽古したところでウォームアップにもならない。無駄に時間をとられるくらいなら、さっさと帰って自分に見合った稽古に励むのが手っ取り早い。

ただし、その分だけ——ド変態親父と一つ屋根の下にいる時間が長くなる。

源斉のことだから、稽古に協力するどころか邪魔ばかりしてくるに違いない。勇作が道場にいるのをいいことに、七代目を継げとしつつこく迫ってくるであろう。あの崩れきっていていやらしくふやけた源斉の面をちらと想像した途端、背筋に悪寒が走った。

そういう意味においてここはやっぱり、何か部活動をした方が精神衛生的には好ましいと思う。

といって剣道部に入るのは気が進まない。

同じ剣術とはいえ、彼が長年修練に励んできた東南北流はそのあたりの竹刀剣術とは訳が違う。入部したところで馴染めないばかりか、日をおかずして休部扱いになる——勇作以外の部員全員が病院送りになることによって——のは目に見えていた。ちなみに、弥生もまた剣道部には所属していない。

（あー、どうすっかなあ……。今さら球技も陸上もあったものじゃねえし。つっても、文化系のしみったれた部活も御免だ。なんかこう、スカッと気晴らしさせてくれるようなクラブはないもんかな……）

大きな川沿いの道を歩きながら、とつこうつ考えている勇作。

道の左手は川が流れ、右手には桜並木が続いている。

見事に咲き乱れた桜の薄紅色が美しく、時々花卉が風にそよいではらはらと舞い落ちてくる。

彼が考えているせいか、洋介も口を閉じている。

しばらくそんな状態が続き、目の前に川をまたぐ鉄道の大きな橋

が見えてきた頃だった。

つと、勇作の足が止まった。

同時にぐいっと向けられたその顔に、思い詰めたような陰しさが漂っている。

洋介はちよつと驚いて

「どうした？ やけにキツついカオして」

「……いや、実はな」

「ん」

短く返事をした瞬間。

「――くたばれツンデレド変態！」

叫ぶが早いか、左肩にかけていたカバンを右手でつかむなり、下から上へ一気に振り抜いた。

その軌道上には丁度、桜の木陰から突然飛び出してきた源斉の姿が――

「勇作、貴様ーッ！ この優しく善良な父がいったい、何をしたとべめっ――」

真下からの鮮やかな一撃をもらにアゴで受けた源斉。

少なくとも人間以外の生物的な悲鳴を上げながら仰向けに倒れこんだ。

その姿、轢き殺されたカエルか潰されたハエに似ている。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

肩で荒く息をしている勇作。

握っているカバンには、源齊のアゴの形そのままに跡がついている。

ついさっき脳天で花瓶を割った（正確には、勇作がお見舞いした）筈だが、どうやって甦ってきたのかは不明である。

一瞬の出来事に洋介は呆然としていたが、やがて恐る恐る

「ゆ、勇作、お前やっぱり……部活やった方が、いいかもな……」
「ああ。俺も、たった今……そう思った」

時間が経つにつれ新入生、そして父兄の姿が目立つようになっていた。

皆まっさらな学生服やセーラー服に身を包み、友人や親と楽しそうに笑いさざめきながら校内へ入っていく。

が、その誰もが一樣に、校門をくぐろうとした瞬間だけはっと視線を横に走らせた。

門柱の傍に女子生徒が一人立っている。

すらりと背が高く、上は小顔、下は均整のとれたボディに美脚。見るからに非の打ち所がないプロポーションであった。背中の中まである束ねた長い髪を微風になびかせ、きりつとしたやや細長の目をじっと道の先の一点に打ち込んでいる。いかにも大人びたその相好は些かも動くことなく引き締められ続いていた。

通り過ぎる人々が目をそばだてたのは、それだけが理由ではなかったらう。

なぜならその女子生徒の手には――身長的一半以上もある、妙に長い竹刀が握られていたからだ。

そんな彼女がやんわりと表情を緩めたのは、向こうからやってきた一人の女子の姿を認めた時である。

「……お待たせ、葉月。出迎えご苦労様」

つかつかと歩み寄ってくるなりそう声をかけた女子生徒は、葉月といった娘より頭二つほど低い。

長い髪をアップにまとめたヘアスタイルと、勝気な感じではあるが整った容貌。その顔が柔らかく緩んで愛らしい笑みになり、葉月に向けられている。

葉月はちよつと首を傾けながら

「お待ちしていました。その制服、京香さまにはよくお似合いですよ？」

答えた。声に落ち着きと、湿ったような艶やかさがある。

「えへへ、そうかな？ 葉月に褒められると、ちよつと照れくさいかも」

言いつつ、くるりと一回転して見せた京香。

彼女は嬉しそうにしたが、すぐに表情を厳しく一変させるなり、短く問うた。

「それはともかく葉月、間違いはないのね？」

「はい、間違いございません。この学校には一人、金銭と色香に目のない男性教師がおりまして、その者に金を渡して秘かに新入生名簿を持ち出させました。そうしましたらば――」

葉月の形のよい目つきがきゅつと鋭く細められる。

「……三年四組片桐弥生の弟で東南北流七代目跡取り、片桐勇作の名前を確かに確認いたしました。彼のクラスは一年二組、奇しく

も京香さまと同じでございます。これは千載一遇のチャンスといっても過言では――」

「葉月さあ」

なおも説明しようとするのを、つと遮った京香。

ふと気付けば、彼女の目線が妙に冷たい。

「はい、京香さま」

「……何も教師に金を渡して聞き出さなくとも、片桐勇作の中学校の者から直接聞き出せばよかったのではないかしら？　そこまでして調べなければ入手できないような情報でもないと思うんだけど」
「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170v/>

ピーチでシャープな彼女達

2011年11月14日12時16分発行